卒業論文

地元志向の形成過程

平成 24 年度入学

九州大学　文学部　人文学科　人間科学コース

社会学・地域福祉社会学部門

平成 28 年 1 月提出

要旨

日本は、少子高齢化や過疎化・過密化などさまざまな人口問題を抱えている。そうした人口問題の中でも、最近特に問題視されはじめているのが、地方からの人口流出、あるいは東京への人口一極集中である。2014 年には内閣に地方創生担当大臣やまち・ひと・しごと創生本部などが新設され、「地方創生」というワードが注目を集めた。

こうした中で、いかに若い世代を地方に呼び込むかという問題に対し、社会全体でさまざまな取り組みが続けられている。しかし、「地方への移住・U ターン」について議論されるとき、一度社会に出たのちに地方移住を選ぶ 30 代、40 代などへの注目と比べ、高校生や大学生など若年層の中でも比較的若い世代への注目は未だ薄いように感じられる。

地方にいる 10 代、20 代の若者に焦点を当てている卑近な例では「マイルドヤンキー」に関する議論などがあるが、そこでの対象は地元から離れたことのないような若者であることが多く、また学術的な検討が十分になされているとは言い難い。

本論文は、10 代から 20 代の若者、その中でも特に U ターンをする若者という、今まで「若者の地元志向に関する議論」と「地方移住や U・I・J ターンに関する議論」のどちらにおいてもあまり表立って取り上げられることのなかった層を対象としている。そして、彼らが地元をどのように考えているのか、また彼らの地元回帰志向がどのように形成され、変遷していくのかといった地元志向の意識構造について考察を加えたものである。

考察にあたっては、先行研究について「現行の地方創生に関する議論」「若者の価値観に関する議論」「地元志向や U ターンに関する議論」の 3 つの角度から検討したうえで、高校生・大学生に対するヒアリング調査を行っている。その結果として、U ターンを行う大学生たちは、「大学進学のために地元の外に出る」という出来事を通し、地元観や地元回帰観が以前に比べフラットでニュートラルなものになっていることが伺えた。そこで最終章においては、そうした調査からみえてきた U ターンを行う若者の価値観を踏まえたうえで、「地方と若者」の今後について論じている。

目次

第１章　研究の背景 1

1.1 研究の動機 1

1.2 研究の目的 3

1.2.1 自分への違和感 3

1.2.2 他者への違和感 5

1.2.3 社会への違和感 7

第２章　先行研究の整理 11

2.1 「地方創生」時代の背景 11

2.1.1 人口減少問題の展開と「増田レポート」 11

2.1.2 「選択と集中」論 12

2.2 若者の価値観についての先行研究 15

2.2.1 先行研究及びデータからみる若者の価値観 15

2.2.1.1 「現実的」な若者たち 16

2.2.1.2 若者の消費と地元志向 17

2.2.1.3 「幸福」な若者たち 19

2.2.2 時代背景からみる若者の価値観 22

2.2.2.1 虚構の時代の先へ 22

2.2.2.2 「不可能性の時代」と地元志向 23

2.3 地元志向及びＵターンについての先行研究 25

2.3.1 これまでの「地元志向」 25

2.3.2 Uターンの過去、現在 27
第3章 調査概要及び結果 30
3.1 調査概要 30
3.2 高校生への調査 31
3.2.1 高校生の地元に対する意識 32
3.2.2 高校生の都会志向・地元志向 34
3.2.3 高校生の地元回帰志向 36
3.3 大学生への調査 38
3.3.1 Aさんの場合 39
3.3.2 Bさんの場合 44
3.3.3 Cさんの場合 47
3.3.4 Dさんの場合 50
3.3.5 Eさんの場合 53
3.3.6 Fさんの場合 56
3.3.7 Gさんの場合 58
3.3.8 Hさんの場合 61
第4章 調査内容の考察 65
4.1 若者の地元観 65
4.2 若者の地元回帰への価値観 67
4.2.1 Uターンと家族 68
4.2.2 「二重否定的」地元回帰 70
4.3 〈地元志向〉の形成過程 71

第 5 章　研究の今後 74

5. 1　地方と若者の今後 74

5. 2　本研究における課題 75

5. 3　本研究のまとめ 76

おわりに 77

参考文献・参考資料・ウェブページ 78